

花をうめる

新美南吉

青空文庫

その遊びにどんな名がついているのか知らない。まだそんな遊びをいまの子どもたちがはたしてするのか、町を歩くとき私は注意してみるがこれまでみたためしがない。あのころつまり私たちがその遊びをしていた当時とうじでさえ、他の子どもたちはそういう遊びを知っていたかどうかもあやしい。いちおう私と同年輩どうねんばいの人にはたずねてみたいと思う。

なんだか私たちのあいだにだけあり、後にも先にもないもののような気がする。そう思うことは楽しい。してみると私たちのなかまのたれかが創案そうあんしたのだが、いったいたれだろう、あんなあわれ深い遊戯ゆうぎをつくり出したのは。

その遊びというのは、ふたりいればできる。ひとりがかくれんぼのおにのように眼めをつむって待っている。そのあいだに他のひとりが道ばたや畑にさいているさまざまの花をむしってくる。そして地べたに茶飲ちやのみ茶碗ちやわんほどの——いやもつと小さい、さかずきほどの穴あなをほりその中にとつてきた花をいい按配あんばいに入れる。それから穴あなに硝子がらすの破片はへんでふたをし、上に砂すなをかむせ地面の他の部分とすこしもかわらないようにみせかける。

「ようしか」とおにが催促さいそくする、「もうようし」と合図あいずする。するとおにが眼めをあけてきてそのあたりをきよろきよるとさがしまわり、ここぞと思うところを指先でなでて、花

のかくされた穴あなをみつけるのである。それだけのことである。

だがその遊びに私たちが持った興味きょうみは他の遊びとはちがう。おににかくしおおせて、おにを負かしてしまおうということや、おにの方では、早くみつけて早くおにをやめるということなどにはたいして興味きょうみはなかった。もっぱら興味きょうみの中心はかくされた土中の一握とにぎりの花の美しさにつながっていた。

砂すなの上にそつとはわせてゆく指先にこつんとかたいものがあたるとそこに硝子がらすがある。

硝子がらすの上の砂すなをのける。だがほんのすこし。ちようど人さし指の頭のあたる部分だけ。穴あなからのぞく。そこには私たちのこのみなれた世界とは全然別の、どこかはるかなくにの、おとぎばなしか夢ゆめのような情趣じょうしゆを持った小さな別天地べつてんちがあった。小さな小さな別天地べつてんち。ところがみているとただ小さいだけではなかった。無辺際むへんさいに大きな世界がそこに凝ぎよう縮しゆくされている小ささであった。そのゆえにその指さきの世界は私たちをひきつけてやまなかつたのである。

いつもその遊びをしたわけではない。それをするのは夕暮ゆうぐれが多かった。木にのぼったり、草の上をとびまわったり、はげしい肉体的な遊戯ゆうぎにつかれてきて、夕まぐれの青やかな空気くわいのなごやかさに私たちの心も何がなしとけこんでゆくころにそれをした。それをす

る相手も、たれであつてもかまわぬといふのではなかつた。第一そんな遊びを頭からこのまないなかもあつた。女の子はたいていすきだつた。

ふたりいればできると私はいつたが、ひとりでもできないことはなかつた。私はひとりでよくした。ただひとりのときは自分がふたりになつてするだけのことである。つまり花をとつてかくしておき、そこからすこしはなれたところへできうべくくんば家の角を一つまわつたところまで、いつておにになり、眼めをとじて百か二百かぞえ、それからさがしに出かけるのである。

だがそれをひとりでするときは心に流れるうらわびしさが、硝子がらすの指先にふれる冷たさや、土のしめつぽい香かおりや、美しい花の色にまでしみて余計よけいさびしくなるのだつた。

ふたりか三人でその遊びをしたあと、家へ帰る前に美しい作品を一つ土中にうめておきそのまま帰ることもあつた。その夜はときどきうめてきた花のことを思い出し床とこの中でも思い出してねむるのである。

そんなとき土中のその小さな花のかたまりは私の心の中のたのしい秘密ひみつであつて、母にもたれにも話さない。つぎの朝いつてさがしあててみると、花は土のしめりですこしもしおれずしかし明るい朝の光の中ではやや色あせてみえ私はそれと知らず幻滅げんめつを覚えたの

であった。また前の晩ばんにうめておいた花のことをつぎの朝、子ども心の気まぐれにわすれてしまうこともあった。そういう花が私たちにわすられたままたくさん土にくちてまじったことだろう。

私たちは家に帰る前に、また、そのとき使った花や葉を全部あつめほんとうに土の中に土をもつてうめ、上を足でふんでおくこともあった。遊びのはてにするこの精算は私の心に美しいもの純じゆん潔けつなものをもたらしした。子どもでありながらなんといいらしいことをしたものだろう。

ある日の日暮ひぐれどき私たちはこの遊びをしていた。私に豆腐屋とうふやの林太郎りんたろうに織布工場しよくふのツル——の三人だった。私たちは三人同い年だった。秋葉あきはさんの常夜燈じょうやとうの下でしていた。ツルは女だからさすがに花をうまくあしらい美しいパノラマをつくる、また彼女かのじよはそれをつくり私たちにみせるのがすきだった。ではじめのうち林太郎りんたろうと私のふたりがおにでツルのかくした花をさがしてばかりいた。

私はツルのつくった花の世界のすばらしさにおどろかさされた。彼女は花びらを一つずつ用い草の葉や、草の実をたくみに点景てんけいした。ときには帯おびのあいだにはさんでいる小さい巾着きんちやくから、砂粒すなつぶほどの南京玉なんきんたまを出しそれを花びらのあいだに配はいした。まるで花園

に星のふつたように。そしてまた私はツルがすぎだった。

遊びにはおのずから遊びの終わるときがくるものだが、最後にツルと林太郎とふたりで花をかくし私がひとりおになつた。「よし」といわれて私はさがしにいったが、いくらしがしてもみあたらない。「もつと向こうよ、もつと向こうよ」とツルがいうままにそのあたりをなでまわるがどうしてもみあたらない。林太郎はにやにや笑つて常夜燈にもたれてみている。林太郎はただツルの花をうずめるのをみただけに相違ない。「お茶わかしたよ」ととうとう私はかぶとをぬいだ。すれば、ツルの方で意外のところから花のありかを指摘してみせるのが当然なのだがツルはそうしなかつた。「そいじや明日さがしな」といった。

私は残念でたまらなかつたのでまた地びたをはいまわつたがついにみつからなかつた。でその日は家に帰つた。たびたび常夜燈の下の広くもない地びたを眼にうかべた。そのどこかに、ツルがつくつたところのこの世のものならぬ美しさをひめた花のパノラマがあることを思つた。その花や南京玉の有様が手にとるように閉じた眼にみえた。

朝起きるとすぐ私は常夜燈の下へいつてみた。そしてひとりでツルのかくした花をさがした。息をはずませながら。まるで金でもさがすように。だがついにみつからなかつた。

それから以後たびたび思い出してはそこへいつてさがした。花はもうしおれはてているだろうということはすこしも考えなかつた。いつでも眼を閉じさえすれば、ツルのかくした花や南京玉なんきんだまが、水のしたたる美しさでうす明かりの中にかぶのであつた。たれか他の者こまにみつけ出されると困るので、私はひとりのときにかぎつてそこへさがしにいった。

遊び相手がなくてひとりさびしくいるとき、常夜燈じょうやとうの下にツルのかくしたその花があるという思いは私を元気づけた。そこへかけつけ、さがしまわるあいだの希望きぼうは何にもかえがたかつた。いくらさがしてもみつからない焦燥しょうそうもさることながら。

ところがある日、私は林太郎りんたろうにみられてしまった。私が例のように常夜燈じょうやとうの下をすみからすみまでさがしまわっていると、いつのまにきたのか林太郎が常夜燈じょうやとうの石段いしだんにもたれてとうもろこしをたべていた。私は林太郎にみられたと気づいた瞬間しゆんかんぬすみの現行げんこうをおさえられたようにびくつとした。私はとっさのあいだにごまかそうとした。

だが、林太郎りんたろうは私の心の底までつまり私がツルをすいているということまでみとおしたようににやにやと笑つて「まださがいとるのけ、ばかだな」といった。「あれ嘘うそだつただよ、ツルあ何も埋いけやせんだつただ」

私は、ああそうだつたのかと思つた。心についていたものがのぞかれたように感じて、

ほつとした。

それからのち、常夜燈じょうやとうの下は私にはなんの魅力みりよくもないものになってしまった。ときどきそこで遊んでいて、ここには何もかくされてはないのだと思うとしらじらしい気持ちになり、美しい花がかくされているのだと思ひこんでいた以前のことをなつかしく思うのであった。

林太郎が私に真実しんじつを語らなかつたら、私にはいつまでも常夜燈じょうやとうの下のかくされた花の思ひは楽しいものであつたかどうか、それはわからない。

ツルとはその後、同じ村にいながら長いあいだ交渉こうしょうをたつていたが、私が中学を出たときおりがあつて手紙のやりとりをし、あいびきもした。しかし彼女かのじょはそれまで私があることがわかり、ひどい幻滅げんめつを味わつたのは、ツルがかくしたようにみせかけたあの花についての事情じじょうと何か似にていてあわれである。

青空文庫情報

底本：「花をうめる 新美南吉童話作品集5」てのり文庫、大日本図書

1989（平成元）年4月26日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集第三巻」大日本図書

1980（昭和55）年7月31日初版第1刷発行

初出：「哈爾濱日日新聞」

1939（昭和14）年10月15日～10月31日

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年2月18日作成

2012年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花をうめる

新美南吉

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>